様式３

会　　議　　録

<table>
<tr><td colspan="2">会議名
（審議会等名）</td><td colspan="4">令和３年度　第２回相模原市発達障害者支援地域協議会</td></tr>
<tr><td colspan="2">事務局
（担当課）</td><td colspan="4">陽光園
電話０４２－７５６－８４１０（直通）</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催日時</td><td colspan="4">令和４年１月２０日（木）　１５時００分～１７時００分</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催場所</td><td colspan="4">相模原市民会館３階　第１大会議室</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出席者</td><td>委　員</td><td colspan="4">１７人（別紙のとおり）</td></tr>
<tr><td>その他</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td>事務局</td><td colspan="4">１２人（陽光園所長、発達障害支援センター所長、他１０人）</td></tr>
<tr><td colspan="2">公開の可否</td><td colspan="2">■可　□不可　□一部不可</td><td>傍聴者数</td><td>１人</td></tr>
<tr><td colspan="2">公開不可・一部不可の場合は、その理由</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td colspan="2">会議次第</td><td colspan="4">１　委嘱式
２　議題
（１）市の発達障害支援について
ア 陽光園
（ア）関係機関への支援について
（イ）令和３年度主催研修等事業及び研究協力について
イ　発達障害支援センター
（ア）発達障害啓発事業について
（イ）インクルーシブ・プログラム開発事業について
（２）各部会における取組状況の報告
（ア）乳幼児期部会
（イ）学齢期部会
（ウ）成人期部会
３　その他</td></tr>
</table>

審　議　経　過

主な内容は次のとおり。

１　委嘱式

２　議題

（１）市の発達障害支援について（会長の進行により議事が進められた）

ア陽光園

（ア）関係機関への支援について（資料１）

（イ）令和３年度主催研修等事業及び研究協力について（資料２）

（千谷委員）すでに知っている事業もあったが、「えらべるサポート」など、知らない事業もあった。「えらべるサポート」がもっと広がるとよい。ワンダートンネルでも定期的な保育所等訪問を行っているが、公的な機関の巡回訪問の数は少なく、対象の子どもの人数が多かったり、年２回の訪問に合わせて先生方が困り感をまとめることの難しさがあるため、このような制度が沢山増えると良い。

（日戸会長）グレーゾーンがキーワードではないかと思う。グレーゾーンのお子さんはお子さん自身も園の先生も困っている。ご家庭でもできる支援として「TOIRO」という仕組みも導入していくということではないかと思う。

イ発達障害支援センター

（ア）発達障害啓発事業について（資料３）

（イ）インクルーシブ・プログラム開発事業について（資料４）

(日戸会長)インクルーシブ・プログラム開発事業について補足説明させていただく。文部科学省からの委託事業として実施し、12 月に日本 LD 学会で発表した。その際文部科学省担当者から講評いただいた。知的障害・発達障害の人達が大人になってからも、ともに学び仲間がいて居場所がある支援をしていく。うまくいっていない人だけでなく、うまくいっている人たちに対しても仲間づくりの支援を同世代の仲間がいる大学という場を活用して行っていく。神戸大が先進的に行っているが、行政と協力して行っているのは全国で類がなく、相模原市が突出して取り組んでいるという話をいただいた。常に発達障害支援センターの方の協力をいただき、開発にあたり非常に感謝している。２月１２日午前は当事者で、午後は文部科学省の方を招いたり基調講演をしたり、当事者の実践報告を行う予定。お時間がある方はお申し込みいただけるとよい。

（小泉委員）インクルーシブ・プログラム開発事業に携わっており、何度か会議にも参加した。感想になるが、障害のある方が経験を積む場となってい

るが、それだけでなく障害の有無に関わらず色々な方々が関わる機会になっていると感じる。身体障害の方は見た目で分かりやすいが、発達障害や知的障害の方は見ただけだと分かりにくさがあり、一般の方と障害の方が関わる機会が増えてくるのはよい。多くの人は、発達障害の方の関わり方がわからず困っているのではないか。こういった取り組みが各大学に広がるとよい。

（２）　各部会における取り組み状況の報告

（ア）乳幼児期部会（資料５）

（見目委員）養護学校では小学部から就学する方も一定数いるが、療育に繋がっていない保護者もいる。療育につながっていない保護者への支援のとりこぼしがないよう、切れ目のない支援を行うために初期の段階から療育につながっておくことが、学校につながる上で大切だと感じる。

（日戸会長）できるだけ切れ目のない、取りこぼしのない支援は大切である。

（日戸会長）保護者の療育への理解不足とはどのようなことか。

（南湖委員）周りから支援の手が必要と思われているお子さんでも保護者の気持ちが熟していなかったり、様子を見ようという保護者がいるという話があった。保護者の方のニーズも多様で細かくなってきているので、保護者のニーズとお子さんの発達段階の見極めを支援の中で行っていく事が大切だと感じる。

（千谷委員）療育というものは障害児が受けるものというイメージがあり、子育てについて保護者が相談したいと思っても、障害児が受けるものはハードルが高くなってしまい、保護者が気楽に児童発達支援センターに足を運ぶことは社会的背景として難しいのではないかと感じた。保護者が 20 歳位で、お子さんが生後半年位だとそんな気楽に相談できないよね、というようにもう少し保護者の心情に寄り添った議論ができるとよいと感じた。もう一方では、早い時期に療育に通うことでお子さんの発達の凸凹を治せると考える保護者もいるのではないか。お子さんに寄り添っていくということを保護者に伝える難しさを感じ、検討する必要があると考えさせられるワーキングだった。保護者が療育に対しての理解不足ということではないので、タイトルは誤解のないものにすべきではないか。

（日戸会長）グレーゾーンというキーワードが出てきたが、療育の対象範囲が広がることで、色々な課題が出てくるのかもしれないと感じた。

（神谷委員）グレーゾーンという表現で医療受診をしても、イメージが各々異なるため、抽象的な言葉の共有を丁寧に行う必要があると感じる。障害を持ったお子さんだけでなく、保護者の育ってきた背景等に関係するため、こうすれば解決する、ということは難しく状況に応じて対応し、医療として伝えるべきことがある場合は伝えている。「療育を受けてきて」と伝えてしまうことがあるが、必要に応じて連携できるとよい。

（日戸会長）医療の現場で個別性を大切にしているとわかった。

（イ）学齢期部会（資料６）
（島森委員）保護者支援として、療育という言葉を先に出されると保護者は理解しがたい。子育てでこの子にどのように寄り添うかがあり、一人で抱え込まず一緒に考えると言ってもらえるとありがたい。たまたま繋がりを得て一番利用したのは医療機関。相談の時間が限られているため、必ず記録を取り先生に見ていただき、助言を受けていた。今は間口が広がっているが、保護者はどこが良いのか調べきれない。困った時にどこにどう相談したらよいのかわからない。もっとわかりやすく、少しでいいので地域で話を聞いてもらえる場が欲しい。家庭と教育の場が同じ方向を向かないと本人達が迷ってしまう。学校の先生が医療の話を聞いてくれたり、親がいかに子育てに関わるかを示すことが大事だと思う。保護者も努力する事が大事だと感じる。
（日戸会長）まず子育てから出る悩みを受けてくれる場が必要。子育て、学校、医療が同じ方向を向く事が大切。保護者が主体的に動けるようにする視点も大切。
（千谷委員）本人に対しても、支援という言葉を使うことで支援者との関係性の枠組みや意味合いに色がつくような感じがする。支援すると思ったことはなく、逆に保護者から教えてもらうことが多い。保護者とチームで動いており、チームメイトと考えているので、支援という言葉が不思議に感じる。
（日戸会長）インクルーシブ・プログラムでも縦関係の支援に違和感を感じる当事者がおり、横の関係の支援、お互い助け合える関係が求められているのではないかと感じた。

（ウ）成人期部会（資料７）
（赤石澤委員）今回の研修後内容を持ち帰り所内で検討した。レベル２に偏りがあり就労支援に偏っており、余暇活動の少なさを感じた。余暇活動等の取組みを調べることも良いのではないかと感じた。また現場として相談歴がある人にその相談先へ経過をフィードバックしていなかったという気づきがあり、インターフェイスが機能していなかったと感じるのでインターフェイスの仕組みが機能していく取り組みがあるとよいと感じた。縦と横のつなぎをどこが担うかを検討すべきかではないか。成人になると進む進路の核となる所がなくなり、本人が自由に行動できる部分があるため、レールから外れてしまうとつなぎが途切れてしまう難しさがある。もう少し時間をかけて支援機関等を書き込むと相模原市の特性が見えるのではないか、その時間を取ってもよいのではないかと感じた。
（日戸会長）レベル２が偏っているという言い方もできるが、逆にレベル２が充実しているともいえるのではないか。インターフェイスについてはフィードフォ

ワードとフィードバックの両方、申し送りと引継ぎを常に関係機関と丁寧に行うと人材育成にもつながると本田先生から教えていただいた。機関同士で連携する際、個人情報への配慮は必要だがやり取りがあるだけで違うだろう。

（落合委員）発達障害に特化した余暇支援が不十分、というところではインクルーシブ・プログラム等が当てはまるのではないか。

（事務局）令和３年度から受託事業として実施しているが、令和２年度より問題意識を持って取り組んできた。今年度の報告を２月にさせていただくが、まだまだ改善したいと考えており、引き続き充実できるよう検討していきたいと考えている。

（落合委員）今後、多様な人との交流の場が事業として稼働すると良いと感じる。

（日戸会長）就労支援は充実してきているが、余暇支援や生活支援（生きがいや生活の質を上げていくこと）の必要性も共通認識が出来たのではないか。

（神谷委員）医療がメインの生活の場にならない様に治療しているが、学校や社会に所属して年齢で支援が途切れてしまう難しさは臨床の場で感じている。困ったらまた戻れる場として医療が機能していけるように下支えしていけたらと考えている。難しい人ほど医療に繋がりにくく、医療の現場でのアウトリーチはまだ難しい現状にある。陽光園や児童相談所がつながっているから期間があいてもまた医療に戻ってこれており、インターフェースとして機能しているからだと感じている。

４　その他

・光が丘地区の公共施設再編に向けた取組について（報告）

青葉小学校跡地を利用し施設再編に向け今年度から取り組んでいる。ワークショップが令和３年２月に終わり、それを経て地域再編を進めていく。

今後進捗状況の報告を行う。

今後のスケジュールについてのお知らせ

・乳幼児期部会　　令和４年２月２４日
・学齢期部会　　令和４年２月２５日
・成人期部会　　令和４年２月２２日
・令和４年度第１回の協議会　令和４年７月頃

どの会議も開催形態や開催場所については、新型コロナウィルス感染症に係る国や市の動向に合わせて、今後連絡予定。

以　上

令和３年度　第２回相模原市発達障害者支援地域協議会委員出欠席名簿

	氏　　名	所　属	備　　考	出欠席
1	日戸　由刈	相模女子大学	会長	出席
2	大山　宜秀	一般社団法人相模原市医師会	副会長	欠席
3	神谷　俊介	北里大学病院		出席
4	柳場　秀雄	相模原市自閉症児・者親の会		出席
5	島森　政子	相模原市障害児者福祉団体連絡協議会		出席
6	中島　博幸	社会福祉法人風の谷		欠席
7	赤石澤　勝	地域活動支援センターカミング		出席
8	斎藤　優子	社会福祉法人すずらんの会ぱれっと		欠席
9	千谷　史子	ＮＰＯ法人ワンダートンネル		出席
10	南湖　浩一郎	児童発達支援センターいっぽ		出席
11	小泉　剛	社会福祉法人相模原市社会福祉事業団		出席
12	見目　茂則	神奈川県立相模原養護学校		出席
13	松本　祥勝	学校教育課		出席
14	水野　正人	青少年相談センター		出席
15	髙橋　麻矢	相模原公共職業安定所		出席
16	加藤　智也	相模原警察署生活安全第一課		欠席
17	米山　守	高齢・障害者福祉課		出席
18	宍倉　久里江	精神保健福祉センター	代理出席	出席
19	落合　万智子	緑高齢・障害者相談課		出席
20	遠山　芳雄	保育課		欠席
21	江成　敏郎	こども家庭課		出席
22	波田野　房枝	南子育て支援センター		出席
23	秋本　伸幸	児童相談所		欠席